

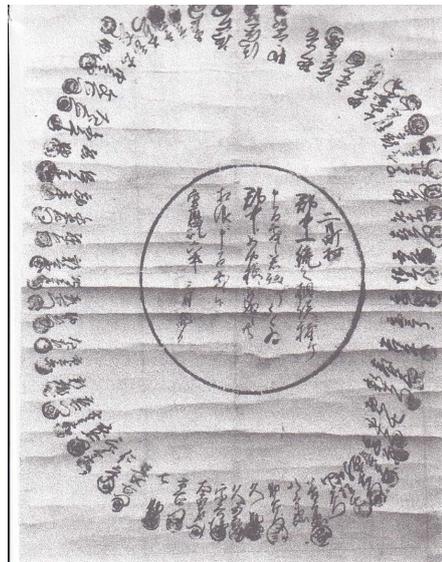
## 宝暦騒動における高鷲村関係者(1) 宝暦騒動(郡上一揆)について

宝暦の郡上一揆(宝暦 4 年～宝暦 8 年)は、郡上藩が年貢の取り方を検見取に変えようとしたことをきっかけに起こった一揆である。郡上の金森藩は数年内に 2 度の国替えがあり、江戸屋敷も 2 度火事にあつた。藩主金森頼錦は幕府の奏者番役になり、将軍の側に仕えるようになると、参勤交代の費用で財政が苦しいうえに藩主の交際は広くなり、出費は増えるばかりであった。藩は御用金を集めたり、税を増やしたりしたが、まだまだお金が足りず年貢の取り方を定免取から検見取に変えた。

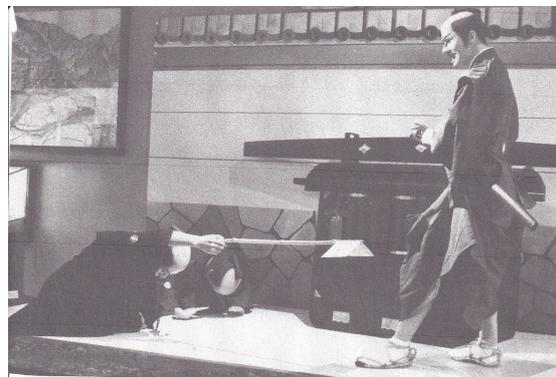
郡上の百姓達は藩に嘆願書を出したり、城下に押しかけたりして検見取を止めるよう訴え続けた。驚いた藩の家老の 3 人は願いを聞き入れ、江戸の藩主に伝える約束をした。藩は幕府の役人と相談して笠松代官所に庄屋達を呼び出しむりやり検見取を認めさせた。これに対し農民の有志 70 人は那留ヶ野の帳締谷で笠連判状を作り団結し、江戸の藩主に直に訴えることにした。江戸に向かった 40 人の農民は藩主に願い出たが、藩の役人に捕らえられてしまった。郡上でも多くの農民が捕らえられ一揆の仲間から次々と百姓が抜けていった。一揆の仲間に入ろうとしなかった百姓は、寝百姓といわれた。

喜四郎・善右衛門・長助・定次郎・藤吉の 5 人は老中酒井忠寄が登城する途中に駕籠訴を訴えました(駕籠訴の内容：・・・郡上藩の百姓が、130 人も牢屋につながれ、男達はちりじりになっていなくなり、江戸では 40 人余りが閉じ込められ、村に残された家族も難儀しています。郡上藩は、山に囲まれ土地がやせている上に、寒さや獣の害が多く毎年不作で困り切っています。私どもはなんでもかんでも検見取に反対する気はありませんが、こんなに年貢が重くなってはどうにもなりません。私どもの願いをお聞き下されば、検見取のこともお受けいたします。

・・・) 宝暦 6 年になると、駕籠訴



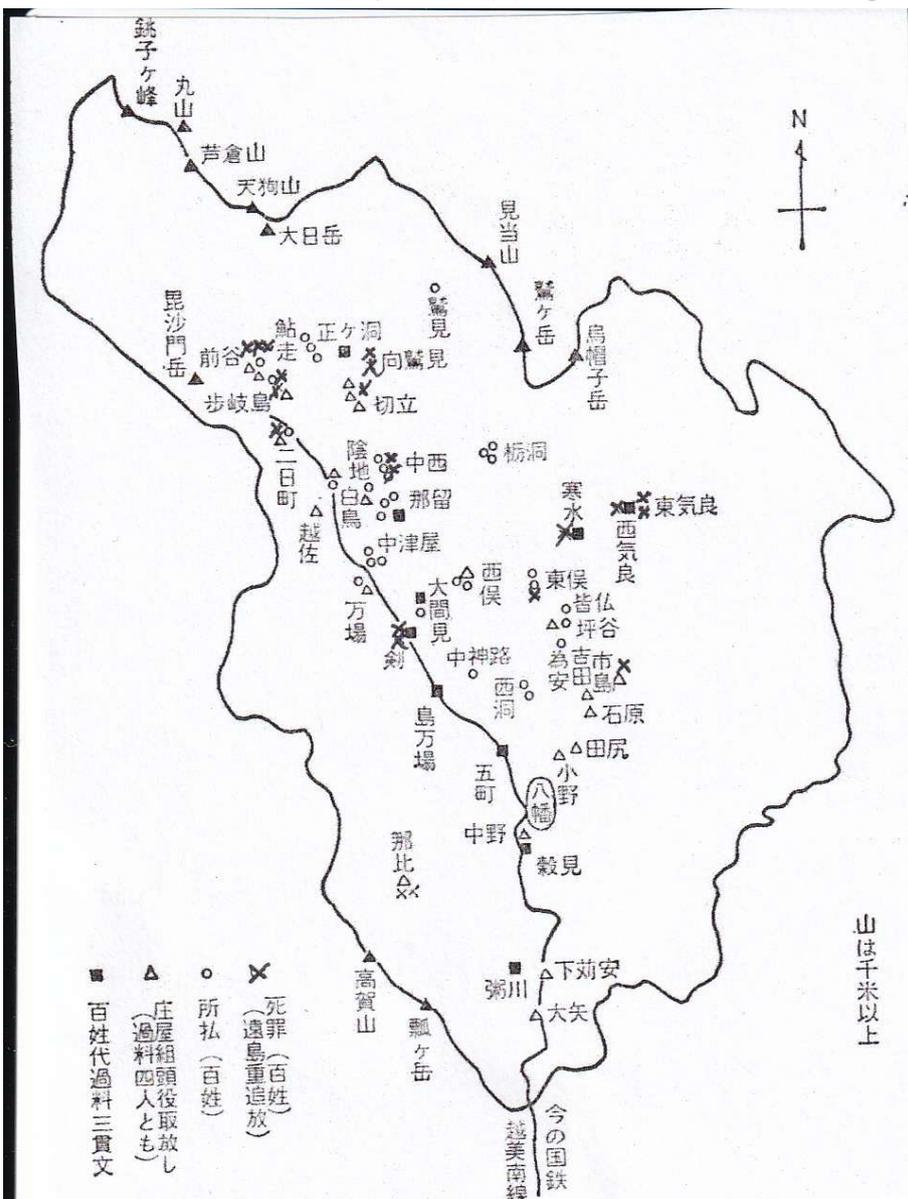
傘連判状の写真



駕籠訴(白山文化博物館蔵) 切立村喜四郎・東気良村善右衛門・同長助・前谷村定次郎・那比村藤吉の 5 人は、老中酒井忠頼が駕籠で登城する途中に駕籠訴を起、死罪を覚悟して訴えた

に郡上の村々に立ち百姓が増え、村々で連判状がつくられた。また駕籠訴を訴えた6人は郡上に返され、それぞれ村の牢屋に預けられた。宝暦8年になると、郡上藩の足軽等が帳元を歩岐島村四郎左衛門の家に押し入り、帳面や金を奪った。すると立百姓達3000人が歩岐島村に集まり足軽達と乱闘になった。これを「歩岐島騒動」と騒う。この騒動の最中村預かりとなっていた

郡上宝暦騒動における処分百姓人数村別図 出典:「郡上歴史探訪」



定次郎と喜四郎は脱走して江戸に向かった。脱走した定次郎と喜四郎は、四郎左衛門に「死罪を覚悟で目安箱に訴えでるので郡上から代表を送って下さい」という手紙を出した。4月に歩岐島村治右衛門、二日町村伝兵衛、剣村藤次郎、東俣村太郎左衛門、市島村孫兵衛、向鷺見村弥十郎の6人が評定所の目安箱に箱訴した。7月になると、老中酒井忠寄から裁判の命令が出され、老中をはじめ幕府の役人、郡上藩主、藩の役人及び農民達が取り調べを受けた。取調は厳しく、判決を待つ前に21人もの農民が牢死した。

翌宝暦9年1月に江戸から郡上に送られた前谷村定次郎、歩岐島村四郎左衛門、寒水村由造の首が、穀見の刑場で獄門にさらされた。

宝暦の郡上一揆で藩主金森頼錦は領地を没収され郡上藩を追放、変わって宮津藩主青山幸道が郡上藩を治めることになったが、検見取は実施された。

(出典:「郡上歴史探訪 ふるさとをゆく」より引用)

〔高鷺の宝暦郡上一揆に関わった人についてはNO126号にて記す〕